

問 1 医薬品の本質に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 医薬品は、多くの場合、人体に取り込まれて作用し、効果を発現させるものである。
- b 医薬品は、人の疾病の診断、治療若しくは予防に使用されること、又は人の身体の構造や機能に影響を及ぼすことを目的とする。
- c 一般用医薬品は、医療用医薬品と比較すればリスクは相対的に低いと考えられるが、科学的な根拠に基づく適切な理解や判断によって適正な使用が図られる必要がある。
- d 一般用医薬品には、製品に添付されている文書（添付文書）や製品表示に必要な情報は記載されていない。

	a	b	c	d
1	誤	正	誤	正
2	正	誤	誤	誤
3	正	誤	誤	正
4	正	正	正	誤
5	誤	正	正	正

問2 医薬品の本質に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 医薬品は、有効性、安全性等に関する情報が集積されており、随時新たな情報が付加されるものである。
- b 一般用医薬品の販売に従事する専門家は、医薬品に関する新たな情報の把握に努めるべきである。
- c 人体に対して使用されない医薬品は、人体がそれに曝<sup>さら</sup>されて健康を害するおそれはない。
- d 医薬品の販売を行う者は、製造販売業者等からの情報に日頃から留意しておくことが重要である。

	a	b	c	d
1	誤	正	正	誤
2	正	誤	正	正
3	正	正	誤	正
4	正	誤	正	誤
5	誤	正	誤	正

問3 医薬品のリスク評価に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 医薬品は、使用方法を誤ると健康被害を生じることがある。
- b 医薬品の効果とリスクは、薬物暴露時間と暴露量との和で表現される用量－反応関係に基づいて評価される。
- c 医薬品の投与量と効果の関係は、薬物用量を増加させるに伴い、効果の発現が検出されない「無作用量」から、最小有効量を経て「治療量」に至る。
- d 新規に開発される医薬品のリスク評価は、安全性に関する非臨床試験の基準である Good Laboratory Practice (GLP) に準拠して実施されている。

	a	b	c	d
1	正	正	誤	正
2	誤	正	誤	誤
3	正	誤	正	正
4	誤	誤	正	正
5	正	正	正	誤

問4 医薬品のリスク評価に関する以下の記述のうち、正しいものはどれか。

- 1 少量の医薬品の投与であれば、発がん作用、胎児毒性や組織・臓器の機能不全を生じる場合はない。
- 2 ヒトを対象とした臨床試験における効果と安全性の評価基準として、Good Vigilance Practice (GVP) が制定されている。
- 3 医薬品については、食品と同等の安全性基準が要求されている。
- 4 50%致死量 (LD50) は、薬物の毒性の指標として用いられる。

問5 健康食品等に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 健康増進や維持の助けとなる食品は、一般的に「健康食品」と呼ばれる。
- b 健康補助食品（いわゆるサプリメント）の中には、カプセル、錠剤等の医薬品と類似した形状で発売されるものも多い。
- c 近年、セルフメディケーションへの関心が高まるとともに、健康補助食品（いわゆるサプリメント）などが健康推進・増進を目的として広く国民に使用されるようになった。
- d 機能性表示食品は、疾病に罹患している者の健康の維持及び増進に役立つ旨又は適する旨を表示するものである。

	a	b	c	d
1	正	正	誤	正
2	誤	正	誤	誤
3	正	誤	正	正
4	誤	誤	正	正
5	正	正	正	誤

問6 医薬品の副作用に関する以下の記述について、( )の中に入れるべき字句の正しい組み合わせはどれか。

世界保健機関（WHO）の定義によれば、医薬品の副作用とは「疾病の（ a ）、診断、治療のため、又は身体の機能を正常化するために、人に（ b ）量で発現する医薬品の（ c ）かつ意図しない反応」とされている。

	a	b	c
1	予防	用いられる最小	有益
2	検査	通常用いられる	有害
3	予防	通常用いられる	有害
4	検査	用いられる最小	有益
5	予防	通常用いられる	有益

問7 免疫とアレルギー（過敏反応）に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 免疫は、本来、細菌やウイルスなどが人体に取り込まれたとき、人体を防御するために生じる反応である。
- b 通常の免疫反応の場合、炎症やそれに伴って発生する痛み、発熱等は、人体にとって有害なものを体内から排除するための必要な過程である。
- c 医薬品にアレルギーを起こしたことがない人でも、病気等に対する抵抗力が低下している場合には、医薬品によるアレルギーを生じることがある。
- d 人体にとって、アレルゲンとなり得る物質は、特定の物質に限られている。

	a	b	c	d
1	正	誤	正	正
2	正	正	誤	正
3	誤	誤	正	誤
4	誤	正	誤	正
5	正	正	正	誤

問 8 薬理作用に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 薬物が生体の生理機能に影響を与えることを薬理作用という。
- b 医薬品は、十分注意して適正に使用すれば、副作用を生じることはない。
- c 医薬品による副作用の状況次第では、登録販売者などの専門家は、購入者等に対し、医療機関を受診するよう勧奨する必要がある。
- d 複数の疾病を有する人の場合、ある疾病のために使用された医薬品の作用が、その疾病に対して薬効をもたらす一方、別の疾病に対しては症状を悪化させたり、治療が妨げられたりすることもある。

	a	b	c	d
1	正	正	誤	正
2	正	誤	誤	誤
3	誤	正	正	誤
4	誤	誤	正	正
5	正	誤	正	正

問9 医薬品の不適正な使用に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 一般用医薬品には、習慣性・依存性がある成分を含んでいるものはない。
- b 一般用医薬品は、みだりに他の医薬品や酒類等と一緒に摂取するといった乱用がなされると、過量摂取による急性中毒を生じる危険性が高くなり、慢性的な臓器障害等を生じるおそれがある。
- c 医薬品の販売等に従事する専門家は、薬物乱用の危険性に関する認識や理解が必ずしも十分ではない青少年が、好奇心から身近にある薬物を興味本位で乱用することがあるので、注意が必要である。
- d 薬物依存とは、ある薬物の精神的な作用を体験するために、その薬物を連続的、あるいは周期的に摂取することへの強迫（欲求）を常に伴っている行動等によって特徴づけられる精神的・身体的な状態のことである。

	a	b	c	d
1	正	正	誤	正
2	正	誤	誤	正
3	誤	誤	正	誤
4	誤	正	正	正
5	正	正	正	誤

問10 次の記述は、医薬品と食品の相互作用に関するものである。正しいものの組み合わせはどれか。

- a 外用薬や注射薬であれば、食品によって医薬品の作用や代謝に影響を受ける可能性がない。
- b カフェインを含む総合感冒薬とコーヒーと一緒に服用すると、カフェインの過剰摂取となるものもある。
- c 酒類（アルコール）をよく摂取する者では肝臓の代謝機能が低下していることが多いので、医薬品の代謝に影響を与えることがある。
- d 生薬成分が含まれた食品（ハーブ等）を合わせて摂取すると、生薬成分が配合された医薬品の効き目や副作用を増強させることがある。

1 (a、b)      2 (a、c)      3 (b、d)      4 (c、d)

問 11 第 1 欄の記述は医薬品の使用上の注意の記載に関するものである。  
( ) の中に入れるべき字句は第 2 欄のどれか。

第 1 欄

医薬品の使用上の注意等において幼児という場合は、おおよその目安として、( ) 未満を指すものとされている。

第 2 欄

1 3 歳            2 4 歳            3 5 歳            4 6 歳            5 7 歳

問 12 次の記述は、小児等への医薬品の使用に関するものである。正しいものの組み合わせはどれか。

- a 乳児は一般用医薬品の使用の適否が見極めやすく、乳児向けの用法用量が設定されている一般用医薬品による対処を最大限に行うことが望ましい。
- b 小児は大人と比べて身体の大きさに対して腸が短く、服用した医薬品の吸収率が相対的に低い。
- c 小児は血液脳関門が未発達であるため、中枢神経系に影響を与える医薬品で副作用を起こしやすい。
- d 小児の誤飲・誤用事故防止には、小児が容易に手に取れる場所や目につく場所に医薬品を置かないようにすることが重要である。

1 ( a 、 b )            2 ( a 、 d )            3 ( b 、 c )            4 ( c 、 d )



問 13 高齢者への医薬品の使用に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 肝臓や腎臓の機能が低下していると医薬品の作用が強く現れやすく、若年時と比べて副作用を生じるリスクが高くなる。
- b 実際に医薬品を使用する高齢者の個々の状況に即して、適切に情報提供や相談対応がなされることが重要である。
- c 喉の筋肉が衰えて飲食物を飲み込む力が弱まっている（嚥<sup>えん</sup>下障害）場合があり、内服薬を使用する際に喉に詰ませやすい。
- d 医薬品の副作用で口渇を生じた場合、誤嚥<sup>えん</sup>を誘発しやすくなる。

	a	b	c	d
1	正	正	正	誤
2	正	正	誤	正
3	正	誤	正	正
4	誤	正	正	正
5	正	正	正	正

問 14 高齢者、妊婦又は妊娠していると思われる女性への医薬品の使用に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 医薬品の使用上の注意等においては、おおよその目安として65歳以上を高齢者としている。
- b ビタミンA含有製剤は、妊娠前後の一定期間に通常の用量を超えて摂取すると胎児に先天異常を起こす危険性が高まるとされている。
- c 便秘薬は、その配合成分や用量によっては流産や早産を誘発するおそれがあるものがある。
- d 妊娠の有無やその可能性については、購入者側にとって他人に知られたくない場合もあることから、一般用医薬品の販売において専門家が情報提供や相談対応を行う際には、十分に配慮する必要がある。

	a	b	c	d
1	正	正	正	正
2	正	誤	誤	正
3	誤	正	正	誤
4	正	正	正	誤
5	誤	誤	誤	誤

問 15 プラセボ効果（偽薬効果）に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 医薬品を使用したときにもたらされる反応や変化には、薬理作用によるもののほか、プラセボ効果によるものも含まれている。
- b プラセボ効果によってもたらされる反応や変化に、不都合なもの（副作用）はない。
- c プラセボ効果は、医薬品を使用したこと自体による楽観的な結果への期待（暗示効果）や、条件付けによる生体反応、時間経過による自然発生的な変化（自然緩解など）等が関与していると考えられる。
- d プラセボ効果は主観的な変化であり、客観的に測定可能な変化として現れることはない。

	a	b	c	d
1	正	誤	正	誤
2	正	正	誤	誤
3	誤	誤	誤	正
4	誤	正	正	誤
5	正	誤	誤	正

問 16 医薬品の品質に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 医薬品は、適切な保管・陳列をすれば、経時変化による品質の劣化は起こらない。
- b 表示されている「使用期限」は、開封後であっても品質が保持される期限である。
- c 一般用医薬品は、購入後、すぐに使用されるとは限らず、家庭における常備薬として購入されることも多いことから、外箱等に記載されている使用期限から十分な余裕をもって販売されることが重要である。
- d 品質が承認された基準に適合しない医薬品、その全部又は一部が変質・変敗した物質から成っている医薬品は、販売が禁止されている。

	a	b	c	d
1	正	正	正	正
2	正	正	誤	誤
3	誤	正	正	誤
4	誤	誤	誤	正
5	誤	誤	正	正

問 17 医薬品による副作用等に対する基本的考え方に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 副作用については、医薬品の販売に従事する専門家を含め、関係者が医薬品の安全性の確保に最善の努力を重ねることが重要である。
- b 副作用は、それまでの使用経験を通じて知られているもののみならず、科学的に解明されていない未知のものが生じる場合もある。
- c 副作用には、日常生活に支障を来すほどの重大なものはあるが、死亡に至った例はない。
- d 一般用医薬品の販売等に従事する者においては、医薬品の副作用等による健康被害の拡大防止に関して、医薬品の情報提供、副作用報告等を通じて、その責務の一端を担っている。

	a	b	c	d
1	正	正	誤	正
2	誤	正	正	誤
3	誤	誤	正	正
4	正	誤	誤	正
5	正	正	正	誤

問 18 次の記述は、サリドマイドとサリドマイド訴訟に関するものである。正しいものの組み合わせはどれか。

- a サリドマイド訴訟は、サリドマイド製剤を妊娠している女性が使用したことにより、出生児に四肢欠損、耳の障害等の先天異常（サリドマイド胎芽症）が発生したことに対する損害賠償訴訟である。
- b 日本では、サリドマイド製剤の催奇形性について海外から警告が発せられた後、直ちに出荷停止、回収措置がとられた。
- c 催眠鎮静成分であるサリドマイドには、副作用として血管新生を妨げる作用もある。
- d サリドマイド製剤には、一般用医薬品として販売された製品はない。

1 (a、b)      2 (a、c)      3 (b、d)      4 (c、d)

問 19 以下のH I V訴訟に関する記述について、( )に入れるべき字句の正しい組み合わせはどれか。

( a )が、ヒト免疫不全ウイルス(H I V)が混入した原料血漿<sup>しょう</sup>から製造された( b )の投与を受けたことにより、H I Vに感染したことに対する損害賠償訴訟である。国及び製薬会社を被告として、1989年5月に大阪地裁、同年10月に東京地裁に提訴し、1996年3月に両地裁で和解が成立した。

国は、H I V感染者に対する恒久対策として、エイズ治療研究開発センター及び拠点病院の整備や治療薬の早期提供等の様々な取組みを推進している。

また、血液製剤の安全確保対策として、検査や( c )の際の間診の充実が図られた。

	a	b	c
1	血友病患者	血液凝固因子製剤	手術
2	白血病患者	血液凝固因子製剤	献血
3	血友病患者	アルブミン製剤	献血
4	白血病患者	アルブミン製剤	手術
5	血友病患者	血液凝固因子製剤	献血

問 20 クロイツフェルト・ヤコブ病（CJD）とCJD訴訟に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a CJDは、タンパク質の一種（プリオン）が原因物質とされている。
- b CJDは、認知症に類似した症状が現れる神経難病である。
- c CJDは、心臓外科手術の際に、原因物質に汚染されたヒト乾燥硬膜が用いられたことにより発生した。
- d CJD訴訟は、生物由来製品による感染等被害救済制度の創設にあたっての契機のひとつとなった。

	a	b	c	d
1	正	正	誤	誤
2	誤	正	正	誤
3	正	正	誤	正
4	誤	誤	誤	正
5	正	誤	正	誤

問 21 かぜ（感冒）の諸症状とかぜ薬の働きに関する以下の記述について、誤っているものはどれか。

- 1 かぜの症状は、通常は数日～1週間程度で自然寛解する。
- 2 かぜの約8割はウイルスの感染が原因である。
- 3 インフルエンザ（流行性感冒）は、かぜと同様、ウイルスの呼吸器感染によるものであるが、感染力が強く、また、重症化しやすいため、かぜとは区別して扱われる。
- 4 かぜ薬とは、ウイルスの増殖を抑えたり、ウイルスを体内から除去する医薬品の総称である。

問 22 解熱鎮痛成分に関する以下の記述のうち、誤っているものはどれか。

- 1 アセトアミノフェンは、主として中枢作用によって解熱・鎮痛をもたらすため、末梢における抗炎症作用は期待できない。
- 2 ピリン系の解熱鎮痛成分として、アスピリンやサザピリンがある。
- 3 イブプロフェンは、一般用医薬品において15歳未満の小児に対しては、いかなる場合も使用してはならない。
- 4 アスピリン喘息はアスピリン特有の副作用ではなく、他の解熱鎮痛成分でも生じる可能性がある。

問 23 次の記述は、解熱鎮痛成分に関するものである。正しいものの組み合わせはどれか。

- a エテンザミドは、痛みが神経を伝わっていくのを抑える働きが作用の中心となっている他の解熱鎮痛成分に比べ、痛みの発生を抑える働きが強い。
- b アセトアミノフェンは、ライ症候群の発生との関連性が示唆されている。
- c アスピリンには、血液を凝固しにくくさせる作用がある。
- d イソプロピルアンチピリンは、ピリン系解熱鎮痛成分によって薬疹等のアレルギー症状を起こしたことがある人には、使用しない。

- 1 (a、b)      2 (a、c)      3 (b、d)      4 (c、d)



問 24 ヒスタミンと抗ヒスタミン成分に関する以下の記述のうち、誤っているものはどれか。

- 1 生体内情報伝達物質であるヒスタミンは、脳の下部にある睡眠・覚醒<sup>せいせい</sup>に関与する部位で神経細胞の刺激を介して、覚醒<sup>せいせい</sup>の維持や調節を行う働きを担っている。
- 2 脳内におけるヒスタミン刺激が低下すると、眠気が促される。
- 3 ホルモンのバランスの変化により妊娠中に生じる睡眠障害は、抗ヒスタミン成分を含有する睡眠改善薬の適用の対象となる。
- 4 抗ヒスタミン成分を含有する医薬品を服用後は、自動車の運転等、危険を伴う機械の操作に従事させてはならない。

問 25 カフェインに関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 胃液の分泌を抑制させる作用があり、副作用として胃腸障害が現れることがある。
- b 眠気や倦怠感<sup>けん</sup>を除去することを目的とした、眠気防止薬の主たる有効成分として配合される。
- c 循環血液中に移行したカフェインの一部は、血液-胎盤関門を通過して胎児に到達することが知られている。
- d 腎臓におけるナトリウムイオン（同時に水分）の再吸収抑制があり、尿量の増加（利尿）をもたらす。

	a	b	c	d
1	正	正	誤	誤
2	正	誤	正	誤
3	正	誤	誤	正
4	誤	正	正	正
5	誤	誤	正	正

問 26 鎮暈薬（乗物酔い防止薬）の代表的な配合成分に関する以下の記述のうち、正しいものはどれか。

- 1 スコポラミン臭化水素酸塩は、内耳にある前庭と脳を結ぶ神経（前庭神経）の調節作用のほか、内耳への血流を改善する作用を示す。
- 2 メクリジン塩酸塩は、他の抗ヒスタミン成分と比べて作用が現れるのが遅く持続時間が短い。
- 3 ジフェニドール塩酸塩は、脳に軽い興奮を起こさせて平衡感覚の混乱によるめまいを軽減させるほか、乗物酔いに伴う頭痛を和らげる作用も期待される。
- 4 プロメタジンを含む成分には、外国において乳児突然死症候群や乳児睡眠時無呼吸発作のような致命的な呼吸抑制を生じたとの報告があるため、15歳未満の小児では使用を避ける必要がある。

問 27 咳や痰、鎮咳去痰薬の働きに関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 気道に吸い込まれた埃や塵などの異物が、気道粘膜の線毛運動によって排出されないときなど、それらを排除しようとして反射的に咳が出る。
- b 咳はむやみに抑え込むべきではないが、長く続く咳は体力の消耗や睡眠不足をまねくなどの悪影響もある。
- c 鎮咳去痰薬は、咳を鎮める、痰の切れを良くする、また、喘息症状を和らげることを目的とする医薬品の総称である。
- d 気道粘膜から分泌される粘液に、気道に入り込んだ異物や粘膜上皮細胞の残骸などが混じって痰となる。

	a	b	c	d
1	正	正	正	正
2	誤	誤	正	誤
3	正	正	誤	誤
4	正	誤	正	正
5	誤	正	誤	正

問 28 次の記述は、鎮咳去痰薬として用いる漢方処方製剤に関するものである。  
正しいものの組み合わせはどれか。

- a 五虎湯及び麻杏甘石湯は、いずれも胃腸の弱い人、発汗傾向の著しい人に適すとされる。
- b 麦門冬湯は、水様痰の多い人には不向きとされる。
- c 半夏厚朴湯は、構成生薬としてカンゾウを含む鎮咳去痰薬である。
- d 柴朴湯には副作用として、頻尿、排尿痛、血尿、残尿感等の膀胱炎様症状が現れることがある。

1 (a、b)      2 (a、c)      3 (b、d)      4 (c、d)

問 29 口腔咽喉薬やうがい薬（含嗽薬）に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 噴射式の液剤では、息を吸いながら噴射すると気管支や肺に入ってしまうおそれがあるため、軽く息を吐いたり、声を出しながら噴射することが望ましい。
- b 含嗽薬は、水で用時希釈又は溶解して使用するものが多いが、調製した濃度が濃すぎても薄すぎても効果が十分得られない。
- c 口腔咽喉薬には、鎮咳成分や気管支拡張成分、去痰成分は配合されていない。
- d 含嗽薬の使用後、すぐに食事を摂ると、殺菌消毒効果が増強される。

	a	b	c	d
1	正	誤	正	誤
2	正	正	正	誤
3	誤	正	誤	誤
4	正	誤	誤	正
5	誤	誤	正	正

問 30 次の記述は、口腔咽喉薬やうがい薬（含嗽薬）に用いられるヨウ素系殺菌消毒成分に関するものである。正しいものの組み合わせはどれか。

- a 口腔粘膜の荒れ、しみる、灼熱感、悪心（吐きけ）、不快感の副作用が現れることがある。
- b レモン汁やお茶などに含まれるビタミンCと反応すると殺菌作用が増強される。
- c 口腔内に使用されても甲状腺におけるホルモン産生に影響を及ぼす可能性はない。
- d ポビドンヨードが配合された含嗽薬では、その使用によって銀を含有する歯科材料（義歯等）が変色することがある。

1 (a、b)      2 (a、d)      3 (b、c)      4 (c、d)

問 31 次の記述は、嘔吐と胃の薬に関するものである。正しいものの組み合わせはどれか。

- a 嘔吐は、脊髄にある嘔吐中枢の働きによって起こる。
- b 消化薬は、胃液の分泌亢進による胃酸過多や、それに伴う胸やけ、腹部の不快感、吐きけ等の症状を緩和することを目的とする医薬品である。
- c 健胃薬に配合される生薬成分は、独特の味や香りを有し、唾液や胃液の分泌を促して胃の働きを活発にする作用があるとされる。
- d いわゆる総合胃腸薬では、制酸と健胃のように相反する作用を期待するものが配合されている場合がある。

1 (a、b)      2 (a、c)      3 (b、d)      4 (c、d)

問 32 次の記述は、胃の薬の配合成分に関するものである。正しいものの組み合わせはどれか。

- a スクラルファートは、アルミニウムを含む成分であるため、透析を受けている人では使用を避ける必要がある。
- b ウルソデオキシコール酸は、胃液の分泌を促す作用があるとされ、消化を助ける効果を期待して用いられる。
- c セトラキサート塩酸塩は、代謝されてトラネキサム酸を生じるため、血栓のある人、血栓を起こすおそれのある人では、生じた血栓が分解されにくくなることが考えられる。
- d ピレンゼピン塩酸塩は、消化管の運動を<sup>こ</sup>亢進して、胃液の分泌を促す作用を示すとされる。

1 (a、b)      2 (a、c)      3 (b、d)      4 (c、d)

問 33 腸の薬とその有効成分に関する以下の記述のうち、誤っているものはどれか。

- 1 腸内細菌のバランスを整えることを目的として、ビフィズス菌、アシドフィルス菌、ラクトミン、乳酸菌、酪酸菌等の生菌成分が用いられる。
- 2 収<sup>れん</sup>斂成分を主体とする止<sup>しや</sup>瀉薬については、細菌性の下痢や食中毒のときに使用して腸の運動を鎮めると、かえって状態を悪化させるおそれがある。
- 3 タンニン酸アルブミンに含まれるアルブミンは、牛乳に含まれるタンパク質から精製された成分であるため、牛乳にアレルギーがある人では使用を避ける必要がある。
- 4 ロペラミド塩酸塩を含む一般用医薬品は、麻<sup>ひ</sup>痺性イレウス発症のおそれがないことから、15歳未満の小児にも適用される。

問 34 瀉下薬とその有効成分に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 酸化マグネシウムは、腸内容物の浸透圧を高めることで糞便中の水分量を増し、また、大腸を刺激して排便を促す。
- b ヒマシ油は、急激で強い瀉下作用をもたらすことから、防虫剤や殺鼠剤を誤って飲み込んだ場合のような脂溶性の物質による中毒に対して効果がある。
- c カルメロースカルシウムは、腸管内で水分を吸収して腸内容物に浸透し、糞便のかさを増やすとともに糞便を柔らかくすることによる瀉下作用を目的として、配合されている場合がある。
- d ピコスルファートナトリウムは、胃や小腸で分解され、大腸への刺激作用を示す。

	a	b	c	d
1	正	誤	正	正
2	誤	正	正	正
3	正	正	誤	誤
4	誤	正	誤	誤
5	正	誤	正	誤

問 35 胃腸鎮痛鎮痙薬とその有効成分の以下の記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 抗コリン成分が副交感神経系の働きを抑える作用は消化管に限定されないため、散瞳、顔のほてり、頭痛、眠気、口渇、便秘、排尿困難等の副作用が現れることがある。
- b アミノ安息香酸エチルは、メトヘモグロビン血症を起こすおそれがあるため、15歳未満の小児への使用は避ける必要がある。
- c オキセサゼインは、妊娠中における安全性が確立されており、妊婦に対して安全に使用することができる。
- d ロートエキスは、吸収された成分の一部が母乳中に移行して乳児の脈が速くなる（頻脈）おそれがある。

	a	b	c	d
1	正	誤	誤	正
2	誤	誤	正	正
3	正	正	誤	誤
4	誤	正	誤	誤
5	正	誤	正	誤

問 36 浣腸薬とその有効成分に関する以下の記述のうち、誤っているものはどれか。

- 1 直腸内に適用される医薬品であり、剤形には注入剤（肛門から薬液を注入するもの）のみが存在する。
- 2 繰り返し使用すると直腸の感受性の低下（いわゆる慣れ）が生じて効果が弱くなるため、連用しないこととされている。
- 3 グリセリンは、浸透圧の差によって腸管壁から水分を取り込んで直腸粘膜を刺激し、排便を促す効果を期待して用いられる。
- 4 炭酸水素ナトリウムは、直腸内で徐々に分解して炭酸ガスの微細な気泡を発生することで直腸を刺激する作用を期待して用いられる。

問 37 次の記述は、駆虫成分に関するものである。正しいものの組み合わせはどれか。

- a サントニンは、回虫の自発運動を抑える作用を示し、虫体を排便とともに排出させることを目的として用いられる。
- b パモ酸ピルビニウムは、回虫に痙攣<sup>けいれん</sup>を起こさせる作用を示し、虫体を排便とともに排出させることを目的として用いられる。
- c ピペラジンリン酸塩は、アセチルコリン伝達を妨げて、回虫及び<sup>ぎょう</sup>蟯虫の運動筋を麻痺<sup>ひ</sup>させる作用を示し、虫体を排便とともに排出させることを目的として用いられる。
- d カイニン酸は、<sup>ぎょう</sup>蟯虫の呼吸や栄養分の代謝を抑えて殺虫作用を示すとされる。

1 (a、b)      2 (a、c)      3 (b、d)      4 (c、d)

問 38 強心薬に配合される主な成分に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a センソは、有効域が比較的広い成分であり、通常用量で悪心（吐きけ）、嘔吐<sup>おう</sup>の副作用が現れることはない。
- b ゴオウは、強心作用のほか、末梢血管の収縮による血圧上昇、興奮作用があるとされる。
- c ジャコウは、強心作用のほか、呼吸中枢を刺激して呼吸機能を高めたり、意識をはっきりさせる作用があるとされる。
- d ロクジョウは、強心作用のほか、強壮、血行促進の作用があるとされる。

	a	b	c	d
1	正	正	誤	誤
2	正	誤	誤	正
3	誤	正	誤	誤
4	誤	誤	正	正
5	誤	誤	正	誤



問 39 高コレステロール改善成分に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a ポリエンホスファチジルコリンは、肝臓におけるコレステロールの代謝を促す効果を期待して用いられる。
- b パンテチンは、低密度リポタンパク質（LDL）等の異化排泄<sup>せつ</sup>を促進し、リポタンパクリパーゼ活性を高めて、高密度リポタンパク質（HDL）産生を高める作用があるとされる。
- c ビタミンB2は、コレステロールから過酸化脂質の生成を抑えるほか、末梢血管における血行を促進する作用があるとされる。
- d ビタミンEは、コレステロールの生合成抑制と排泄<sup>せつ</sup>・異化促進作用、中性脂肪抑制作用、過酸化脂質分解作用を有すると言われている。

	a	b	c	d
1	正	誤	正	誤
2	誤	正	誤	誤
3	正	正	誤	誤
4	誤	誤	正	正
5	正	誤	誤	正

問 40 貧血と貧血用薬（鉄製剤）に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 鉄分の摂取不足を生じて、初期には貯蔵鉄や血清鉄が減少するのみでヘモグロビン量自体は変化せず、ただちに貧血の症状は現れない。
- b 鉄製剤を服用すると便が黒くなることがあるが、これは副作用により消化管から出血をしているためであり、ただちに使用をやめなければならない。
- c 鉄分の吸収は空腹時のほうが高いとされているが、消化器系への副作用を軽減するには、食後に服用することが望ましい。
- d 服用の前後30分に緑茶やコーヒーを摂取すると、それらに含まれているタンニン酸によって、鉄の吸収が良くなる。

	a	b	c	d
1	誤	正	正	誤
2	誤	誤	正	正
3	正	正	誤	誤
4	正	誤	正	誤
5	正	誤	誤	正

問 41 次の記述は、痔と痔の薬に関するものである。正しいものの組み合わせはどれか。

- a 痔の悪化につながるため、食物繊維の摂取は、控えた方がよい。
- b 直腸粘膜と皮膚の境目となる歯状線より上部の、直腸粘膜にできた痔核を内痔核と呼ぶ。
- c 外用痔疾用薬は、局所に適用されるものであるが、配合成分によっては全身的な影響を考慮する必要がある。
- d 内用痔疾用薬は、副作用が増強するため、外用痔疾用薬と併せて用いることはない。

1 (a、c)      2 (a、d)      3 (b、c)      4 (b、d)

問 42 痔<sup>じ</sup>の薬に用いられる次の配合成分のうち、ステロイド性抗炎症成分はどれか。

- 1 プレドニゾロン酢酸エステル
- 2 クロタミトン
- 3 タンニン酸
- 4 ジフェンヒドラミン塩酸塩
- 5 テトラヒドロゾリン塩酸塩

問 43 次の記述は、婦人薬に関するものである。正しいものの組み合わせはどれか。

- a 人工的に合成された女性ホルモンの一種であるエチニルエストラジオールは、妊娠中の女性ホルモンの補充のために用いられる。
- b 婦人薬に配合されるサフランは、鎮静、鎮痛のほか、女性の滞っている月経を促す作用が期待される。
- c 体力中等度以下で、手足がほてり、唇が乾くものの月経不順や更年期障害の諸症状には、温経湯<sup>うんけいとう</sup>が適すとされる。
- d 体力虚弱で、ときに下腹部痛、肩こりなどを訴えるものの月経不順や更年期障害の諸症状には、桂枝茯苓丸<sup>けいしぶくりょうがん</sup>が適すとされる。

- 1 (a、c)      2 (a、d)      3 (b、c)      4 (b、d)

問 44 アレルギーとアレルギー用薬に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 蕁麻疹<sup>じんしん</sup>は、アレルゲン（抗原）との接触以外にも起こることがある。
- b クロルフェニラミンマレイン酸塩は、肥満細胞から遊離したヒスタミンが受容体と反応するのを妨げることにより、ヒスタミンの働きを抑える。
- c 鼻炎用内服薬には、メチルエフェドリン塩酸塩等のアドレナリン作動成分を含むものがある。
- d アトピー性皮膚炎による慢性湿疹<sup>しん</sup>の治療には、一般用医薬品（漢方処方製剤を含む。）のみを用いる。

	a	b	c	d
1	誤	誤	正	正
2	正	誤	誤	誤
3	正	正	正	誤
4	誤	正	誤	正
5	正	誤	正	誤

問 45 次の記述は、鼻炎と鼻炎用点鼻薬に関するものである。正しいものの組み合わせはどれか。

- a 急性鼻炎は、鼻腔<sup>くわう</sup>内に付着したウイルスや細菌が原因となって生じる鼻粘膜の炎症で、かぜの随伴症状として現れることが多い。
- b 鼻炎用点鼻薬は、鼻づまりや鼻みず（鼻汁過多）、くしゃみ、頭重（頭が重い）の緩和を目的として、鼻腔<sup>くわう</sup>内に適用される内用液剤である。
- c スプレー式鼻炎用点鼻薬を使用する前に鼻をかむと、効果が薄くなる。
- d ヒスタミンの遊離を抑える成分は、アレルギー性でない鼻炎に対しては、無効である。

1 (a、b)      2 (a、d)      3 (b、c)      4 (c、d)

問 46 次の記述は、眼科用薬に関するものである。正しいものはどれか。

- 1 点眼薬は、一度に2～3滴点眼することで、1滴のときよりも効果が増す。
- 2 ソフトコンタクトレンズは水分を含みやすいため、ベンザルコニウム塩化物等の防腐剤が使用されている点眼薬は、コンタクトレンズを装着したまま点眼したほうがよい。
- 3 配合成分としてあらかじめ定められた範囲内の成分のみを含む等の基準に当てはまるコンタクトレンズ装着液は、医薬部外品として認められている。
- 4 点眼の際は、容器の先端を眼瞼（まぶた）につけて、薬液が確実に目の中に入るように注意しながら正確に点眼する。

問 47 眼科用薬に含まれる成分とその成分を配合する目的との関係について、正しいものの組み合わせはどれか。

- |   |                |       |                     |
|---|----------------|-------|---------------------|
| a | プラノプロフェン       | ————— | 炎症の原因となる物質の生成を抑える作用 |
| b | コンドロイチン硫酸ナトリウム | ———   | 結膜や角膜の乾燥を防ぐ作用       |
| c | スルファメトキサゾール    | ————— | 抗真菌作用               |
| d | アラントイン         | ————— | 外部の刺激から保護する作用       |

- 1 (a、b)      2 (a、c)      3 (b、d)      4 (c、d)

問 48 皮膚に用いる薬に関する以下の記述のうち、正しいものはどれか。

- 1 外皮用薬は、表皮の角質層が柔らかくなることで有効成分が浸透しやすくなることから、入浴後に用いるのが効果的である。
- 2 化膿<sup>のう</sup>の原因となる黄色ブドウ球菌や連鎖球菌の増殖を防ぐため、創傷部に対しては、繰り返し殺菌消毒薬を適用するべきである。
- 3 外用薬で用いられるステロイド性抗炎症成分は、広範囲に生じた皮膚症状や慢性の湿疹<sup>しん</sup>・皮膚炎を対象とする。
- 4 じゅくじゅくと湿潤している患部には、軟膏<sup>こう</sup>よりも、有効成分の浸透性の高い液剤が適している。

問 49 第 1 欄の記述は皮膚に用いる薬の配合成分に関するものである。第 1 欄の記述に該当する配合成分として正しいものは第 2 欄のどれか。

第 1 欄

皮膚糸状菌（白癬菌<sup>せん</sup>）の細胞膜を構成する成分の産生を妨げたり、細胞膜の透過性を変化させることにより、その増殖を抑える。

第 2 欄

- 1 エタノール
- 2 クロラムフェニコール
- 3 ノニル酸ワニリルアミド
- 4 スルファジアジン
- 5 オキシコナゾール硝酸塩

問 50 毛髪用薬の配合成分に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a カルプロニウム塩化物は、末梢組織（適用局所）において、交感神経系を刺激し、頭皮の血管を拡張、毛根への血行を促すことによる発毛効果を期待して用いられる。
- b 脱毛抑制効果を期待して、女性ホルモン成分の一種であるエストラジオール安息香酸エステルが配合されていることがある。
- c カシュウは、頭皮における脂質代謝を高めて、余分な皮脂を取り除く作用を期待して用いられる。
- d ヒノキチオールは、抗菌、血行促進、抗炎症などの作用を期待して用いられる。

	a	b	c	d
1	正	正	誤	正
2	正	誤	正	誤
3	正	正	誤	誤
4	誤	正	正	正
5	誤	誤	誤	正

問 51 口内炎と口内炎用薬の配合成分に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 口内炎は、1～2週間で自然寛解し、1ヶ月以上にわたって症状が長引くことはない。
- b シコンは、組織修復促進、抗菌などの作用を期待して用いられる。
- c セチルピリジニウム塩化物は、患部からの細菌感染を防止することを目的として配合される。
- d 一般用医薬品の副作用として口内炎が現れることはない。

	a	b	c	d
1	誤	正	正	正
2	正	正	誤	正
3	正	誤	正	誤
4	誤	正	正	誤
5	誤	誤	誤	正

問 52 次の記述は、禁煙補助剤に関するものである。正しいものの組み合わせはどれか。

- a <sup>そしゃく</sup>咀嚼剤は、1度に2個以上使用することで、禁煙達成を早める。
- b 脳梗塞・脳出血等の急性期脳血管障害がある人でも、使用を避ける必要はない。
- c うつ病と診断されたことのある人では、禁煙時の離脱症状により、うつ病を悪化させることがある。
- d 1日1回皮膚に貼付することによりニコチンが皮膚を透過して血中に移行するパッチ製剤がある。

- 1 (a、b)      2 (a、c)      3 (b、d)      4 (c、d)



問 53 ビタミン成分に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a ビタミン成分は、多く摂取することで適用となっている症状の改善が早まる。
- b ビタミンB 2は、脂質の代謝に関与し、皮膚や粘膜の機能を正常に保つために重要な栄養素である。
- c ビタミンB 1 2は、タンパク質の代謝に関与し、皮膚や粘膜の健康維持、神経機能の維持に重要な栄養素である。
- d ビタミンCは、体内の脂質を酸化から守る作用（抗酸化作用）を示し、皮膚や粘膜の機能を正常に保つために重要な栄養素である。

	a	b	c	d
1	誤	誤	正	誤
2	正	誤	誤	誤
3	誤	正	正	正
4	誤	正	誤	正
5	正	正	正	誤

問 54 滋養強壯保健薬に配合されるアミノ酸成分等に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a システインは、髪や爪、肌に存在するアミノ酸の一種で、皮膚におけるメラニンの生成を抑えるとともに、皮膚の新陳代謝を活発にしてメラニンの排出を促す働きがあるとされる。
- b アミノエチルスルホン酸（タウリン）は、肝臓機能を改善する働きがあるとされる。
- c アスパラギン酸ナトリウムは、アスパラギン酸が生体におけるエネルギーの産生効率を高めるとされ、骨格筋の疲労の原因となる乳酸の分解を促す等の働きを期待して用いられる。
- d コンドロイチン硫酸は、軟骨組織の主成分で、軟骨成分を形成及び修復する働きがあるとされる。

	a	b	c	d
1	正	正	正	正
2	正	正	誤	正
3	正	誤	正	誤
4	誤	正	誤	誤
5	誤	誤	誤	正

問 55 第 1 欄の記述は、漢方処方製剤に関するものである。第 1 欄の記述に該当する漢方処方製剤として正しいものは第 2 欄のどれか。

第 1 欄

体力充実して、腹部に皮下脂肪が多く、便秘がちなもの的高血圧や肥満に伴う動悸・肩こり・のぼせ・むくみ・便秘、蓄膿症、湿疹・皮膚炎、ふきでもの、肥満症に適すとされるが、体の虚弱な人（体力の衰えている人、体の弱い人）、胃腸が弱く下痢しやすい人、発汗傾向の著しい人では、激しい腹痛を伴う下痢等の副作用が現れやすい等、不向きとされる。

構成生薬としてカンゾウ、マオウ、ダイオウを含む。

第 2 欄

- |   |                               |   |                                |   |                                  |
|---|-------------------------------|---|--------------------------------|---|----------------------------------|
| 1 | 小柴胡湯 <small>しょうさいこうとう</small> | 2 | 大柴胡湯 <small>だिसайこうとう</small>  | 3 | 防風通聖散 <small>ぼうふうつうしょうさん</small> |
| 4 | 葛根湯 <small>かつこんとう</small>     | 5 | 黄連解毒湯 <small>おうれんげどくとう</small> |   |                                  |

問 56 次の記述は、漢方に関するものである。正しいものの組み合わせはどれか。

- a 漢方処方を構成する生薬には、複数の処方で共通しているものがある。
- b 漢方処方製剤は、用法用量において適用年齢の下限が設けられていないので、生後3ヶ月未満の乳児にも使用してもよい。
- c 小柴胡湯しょうさいこうとうとインターフェロン製剤は、相互作用を起こすため併用を避ける必要がある。
- d すべての漢方薬は作用が穏やかで、副作用が少ない。

1 (a、b)      2 (a、c)      3 (b、d)      4 (c、d)

問 57 消毒薬の以下の記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a クレゾール石鹼液けんは、結核菌を含む一般細菌類、真菌類、ウイルスに対して比較的広い殺菌消毒作用を示す。
- b エタノールやイソプロパノールは、アルコール分が微生物のタンパク質を変性させ、それらの作用を消失させることから、結核菌を含む一般細菌類、真菌類、ウイルスに対する殺菌消毒作用を示す。
- c 次亜塩素酸ナトリウムは、アルカリ性の洗剤・洗浄剤と反応して有毒なガスを発生させるため、混ざらないように注意する必要がある。
- d ジクロルイソシアヌル酸ナトリウムは、塩素臭や刺激性、金属腐食性が比較的抑えられており、プール等の大型設備の殺菌・消毒に用いられることが多い。

	a	b	c	d
1	正	誤	誤	誤
2	誤	正	正	正
3	誤	正	誤	正
4	正	正	正	誤
5	誤	誤	正	誤

問 58 殺虫剤に関する以下の記述のうち、誤っているものはどれか。

- 1 ハエ、ダニ、蚊等の衛生害虫の防除を目的とする殺虫剤には、医薬品に該当するものはない。
- 2 殺虫剤使用に当たっては、殺虫作用に対する抵抗性が生じるのを避けるため、同じ殺虫成分を長期間連用せず、いくつかの殺虫成分を順番に使用していくことが望ましい。
- 3 燻蒸剤使用に当たっては、燻蒸処理が完了するまでの間、部屋を締め切って退出する必要がある。
- 4 蒸散剤は、殺虫成分を基剤に混ぜて整形し、加熱したとき又は常温で徐々に揮散するようにしたものである。

問 59 一般用検査薬に関する以下の記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 専ら疾病の診断に使用されることが目的とされる医薬品のうち、人体に直接使用されることのないものを体外診断用医薬品という。
- b 検体中に存在しているにもかかわらず、その濃度が検出感度以下であったり、検出反応を妨害する他の物質の影響等によって、検査結果が陰性となった場合を擬陰性という。
- c 体外診断用医薬品は、一般用医薬品のみである。
- d 検査に用いる検体は、尿、糞便、鼻汁、唾液、涙液など採取に際して侵襲（採血や穿刺等）のないものである。

	a	b	c	d
1	正	正	誤	正
2	正	誤	正	誤
3	正	正	誤	誤
4	誤	正	正	正
5	誤	誤	誤	正

問 60 次の記述は、妊娠検査薬に関するものである。正しいものの組み合わせはどれか。

- a 妊娠検査薬は、通常、実際に妊娠が成立してから1週目前後の尿中ヒト絨毛性性腺刺激ホルモン（hCG）濃度を検出感度としている。
- b 検体としては、尿中hCGが検出されやすい就寝直前に採取した尿が向いている。
- c 妊娠の確定診断には、尿中ホルモン検査だけでなく、専門医による問診や超音波検査などの結果から総合的に妊娠の成立を見極める必要がある。
- d 妊娠が成立していたとしても、正常な妊娠か否かについては、妊娠検査薬による検査結果では判別できない。

1 (a、b)      2 (a、c)      3 (b、d)      4 (c、d)